

「建学の精神」と「立教ブックレット」

藤原 芳行

1. はじめに

2007年度より、大学と学院の共同企画で「立教ブックレット」の刊行が始まった。「立教ブックレット」は、立教の「建学の精神」をはじめとして、様々なテーマから立教を伝えることを目的としている。

私は、全カリ事務室の職員としてその創刊にかかわった関係で、今回寄稿の依頼を受けた。ここでは、全学共通カリキュラム運営センター（以下、全カリ）または職員の視点で、「立教ブックレット」について書かせていただくことにしたい。

2. 全カリから見た立教ブックレット発刊の経緯

1) 全カリ「立教科目」とGP申請

「立教ブックレット」の創刊は、全カリから見ると、「立教科目」の設置までさかのぼるのではないと思う。立教では、1997年度から、これまでの一般教育課程を再編し、新たな教養教育の試みとして全学共通カリキュラムがスタートした。全カリでは、カリキュラムの硬直化を避けるため、当初から定期的な点検・評価が制度化されているが、その見直しの一環として、タイムリーなテーマを扱う科目と建学の精神を扱った科目のアイデアが出され、2001年度にそれぞれ「時事科目」「立教科目」として、全カリ総合教育の科目として正式に設置されることになった。

「立教科目」は単独の科目ではない。

「建学の精神」が問いかける人間としての基本的なあり方を「倫理性」「社会性」「人間性」の3つの側面として捉え、それをさらに「宗教」「都市」「大学」「人権」といった現代的なテーマに具現化して、そのテーマの下に関連科目が設置されたもので、いわば「立教」をテーマとした総合科目群と考えていただくとうまいかもしれない。

そして、この「立教科目」は、2005年度に文部科学省の特色GP（特色ある大学教育支援プログラム）に採択されることになった。

2) 建学の精神に関わるプログラムの展開

全カリでの「立教科目」の設置は、結果的に見ると、大学評価の指標のひとつである大学の個性化や、自校教育のニーズに貢献することになったが、その発想はより内発的で、なによりも大きかったのは、「建学の精神」に対する、立教の独特な「こだわり」にあったのではないと思う。他大学の特色GPのテーマを見ても、建学の精神を正面から扱ったものは皆無で、「立教科目」に対する他大学の反応を見ても、単に「大学名を冠した科目」程度の認識しかもたれなかったのではないと思う。立教の建学の精神に対する「こだわり」は、他大学と比べるとかなり異質なものであるようだ。

3) 特色GP採択事業としての教科書の編纂

全カリでは、特色GPの補助金による

事業計画の一つとして、立教科目の基幹科目である「立教大学の歴史」の教科書を刊行することと、あわせて教科書を補う読みやすい小冊子をシリーズで刊行してはどうか、という計画をたてた。その際、イメージとして他大学のアーカイブスが刊行している資料などを参考にさせていただいた。

教科書については、「立教大学の歴史」を担当する教員が所属する、立教学院史資料センターが執筆・編集にあたることは難なく決まったものの、一方、小冊子については内容や執筆者をどうするか、頭を痛めた。そこで、寺崎昌男先生（現立教学院調査役）にご相談したところ、学院でも同様な企画を考えているので松平学院長にご相談しては、とのアドバイスをいただき、ここに学院と大学の企画が双方めでたく出会うことになった。立教として、建学の精神に関わる事業が展開する機が熟したと言うべきであろう。

ここから先の立教ブックレット編集に関わる物語は、松平学院長のエッセイにも詳しいと思われるのでここでは省かせていただくが、学院長のお声掛けで、立教について語ることのできるそうそうたるメンバーにお集まりいただくことができた。

私は、創刊号の編集に携わったのみだが、時間的な制約もありかなりの集中作業となったものの、新たな資料などにも接しながら楽しく作業をさせていただいた。編集の裏話を一つご披露すると、創刊号の口絵の長崎港と崇福寺のイラストは、お気づきの方もいると思うが、松平学院長自ら筆を取って描かれたものである。

3. 建学の精神へのこだわり

1) 実は明確には何も示されていない建学の精神

立教は、建学の精神に独自のこだわりを持ってきた大学である、と先にも書いた。そういわれれば、さぞかし立教では構成員に建学の精神が浸透していると思われることだろう。ところが、現実はさにあらず。「建学の精神」として、「キリスト教に基づく教育を施す」と寄付行為に規定されている以外、明らかにこれだというものが示されていないのが実情といたら驚かれることだろう。「道を伝えて己を伝えず」と称えられる創立者ウィリアムズ主教は、残念ながら、これが立教建学の精神と言えるような決定的なメッセージを言葉でわれわれに残しては下さらなかった。

他大学であれば、それは大学の存在理由の前提であって、どうもあえて問うまでもないこととされているらしい。その点で立教が他大学と異なるのが、「建学の精神」とは何なのか、ということ執拗に問い続けている点ではないかと思う。全カリ総合科目での立教科目の誕生も、建学の精神を学生に知らしめると言うよりは、建学の精神を学生とともに問う、というこの文脈に位置づけていただけると、その本来の機能が見えてくるように思う。

2) 一人ひとりが自ら問いかけていくこと

建学の精神を問うには何が必要か。それにはやはり「材料」が必要となる。建学の精神は明らかでなくとも、それを映し出す「材料」はふんだんに与えられている。聖書のメッセージはもちろんのこと、創立者ウィリアムズ主教の言行、守護聖人聖パウロ (St. Paul) のこと、聖公会という教派の特色、歴代のチャプレン・総長 (総理)・教職員の働き、卒業生の活躍、校舎の佇まい、正課教育・正課外教育の独自の展開、などなど。

まずは「材料」を揃えること、そして、その材料をまず知識のレベルで大学の構成員が共有していくことから始まるのではないだろうか。そして、最低限のイメージを共有した上で、各自なりの建学の精神に対する想いや取り組みへと展開していくことを望みたい。

この一見まどろっこしいプロセスが、実に、「立教らしい」営みだと思う。その一人ひとりの構成員（学生、教職員、卒業生）の建学の精神に対する想いが、過去から重なり合って現在のキャンパスの雰囲気醸し出している。それでもなお、立教「建学の精神」は、相変わらず決定的に明らかにされることなく、永遠に問われ続ける魅力的な「謎」であり続けることだろう。そういう意味でも、すべてを語られなかった創立者ウィリアムズ主教は、そのあとを継ぐものにとっても優れた教育者であられたことになる。

4. おわりに：「材料」の大切さ

私事だが、昨年の6月に全カリ事務室から人事課に異動となった。図らずも、職員に対する教育・研修の責任を負うことになったが、その中で、建学の精神を問う営みを、立教固有の教育・研修の項目として、次の世代の職員にもぜひ継承していきたいと思う。共通のデータベースを一人ひとりの立教構成員の中に蓄えていくにあたって、建学の精神に関わる質のよい「材料」が豊かに与えられることは不可欠である。今後刊行されていく「立教ブックレット」のシリーズが、この「よき材料」となってくれるものと確信している。

ふじわら よしゆき
(立教学院総務部人事課)